

平泳ぎ本店第2回公演『えのえを なれみて』
28th-30th,Oct 2016 @早稲田小劇場どらま館

set list

- 0 前説キャンペーン
- 1 鹿
- 2 ド月の3日間
- 3 シシ・カンパニー
- 4 逆灰皿(『熱海殺人事件』と『内角の和』より)
- 5 いつかの劇場
- 6 神里雄大『レッドと黒の膨張する半球体』より
- 7 OUT
- 8 もういい
- 9 おおきなかぶ
- 10 「帰ろう」
- 11 ハッピーナンデスネ
- 12 シカ
- 13 えのえを なれみて

EX.1 とにかく怒れる男たち「6人のトゥーフェイス」→29(土)アフターイベント行き

EX.2 小川の場→29(土)アフターイベント行き

cast

小川哲也 河野竜平 宮倉直門 鈴木大倫 ニノ戸新太 松永健資 松本一歩 丸山雄也

○ 前説キャンペーン

開場してから30分の間に隨時前説。劇場に早く来るとお得(開場時間に含み益を)キャンペーン。

可能であれば、楽屋からの入場が好ましい。楽屋から、舞台を通って客席へ入って観客の方にも一旦死んでもらうという手続き。

俳優による前説は必要事項が盛り込まれていれば、形式は問わない。

・本日は平泳ぎ本店第2回公演『えのえを なれぬて』へご来場いただきまして誠にありがとうございます。

・携帯電話など、音の出る機器は機内モード、マナーモードなど、あらかじめ音の出ないよう~~に設定をお願いします~~必ずあらかじめ電源からお切りください。

・トイレは1階です。劇場の建物内に喫煙所はございません。近隣への迷惑となりますので劇場付近での路上喫煙も固くお断りしております。

おタバコを吸われる際にはここから徒歩5分ほどの大隈講堂横の喫煙所をご利用ください。

・開演まで今しばらくお時間がございますので、御用のお済みでない方は今のうちにお済ませください。

・また上演中は演出の都合により、非常灯を消灯いたします。非常の際には係りの者がご案内いたしますので、慌てず、係りの誘導に従ってください。

・またお手元のチラシ束の中には関係公演のチラシの他にアンケートも入っております。

本日の公演につきましてお気づきの点やご感想ございましたらご記入いただければ幸いです。

・それでは、平泳ぎ本店第2回公演『えのえを なれぬて』、開演まで今しばらくお待ちください。

1 鹿

鈴木大倫出てくる。挨拶。

「えっと、ぼくは鈴木大倫と申します。」

「たいりん！」

「僕は、東京の、あきる野市に住んでいます。ここから新宿まで行って、そこから中央線で1時間40分くらいのところに、僕の地元、あきる野市があります。」

と、麦わら帽子が渡される

「そう、夏にはこんな麦わら帽子がよく似あうような、そんな町です。」

「僕はその町のユニクロで、アルバイトをしています」

「いらっしゃいませ またお越しくださいませ」

「うんうん、今日も忙しいね」

「鈴木さん、シャツってどうやって畳むんですか？」

「うんうん…(と華麗に畳む)」

「バイト先の人にも舞台を観に来てほしいんですが、どう言つたらいいのか分かりません」

「ここだけの話、大倫はバイト先の飲み会の間中ずっと、大史と哲ちゃんにラインをしていました」

「たのしくなかったのかな？」

「そういうわけじゃないんだけど」

「もし今度舞台やるなら教えてね」

「はい、もちろん…」

「やっぱり、うまく言い出せませんでした」

「どうして演劇をやってるの？」

「…。」

「えっと、それはともかくとして、僕はどちらかというと、後ろから槍を押す人だと思います。煽るタイプというか。」

「おい、F、お前の演出はなっちゃいないんだよ」

「そうだそうだ」

F、槍に刺されてこと切れる 信じられないといった心持

「大倫は、どうして演劇をやっているの？」

「このあいだ大学の同期と会って、その子も女優をやっている子で、飲んだんですけど」

「久しぶり」

「乾杯！」

「そのこちょっとふわふわした感じの子で、」

「こないだ共演した○○さんっていう人がね、大御所だったの」

「へえ」

「稽古場での居方とかね、いい役を貰った時の心構えを教えてもらったの」

「なんだ。ちなみにその人って、食ってるの？」

「ううん、バイトしてる。居酒屋」

「大御所なの？」

「大御所だよ」

「歳は？」

「37」

「そっか...」

「なんだかなあ、なんだかなあと思います。人の話を鵜呑みにしないで自分で考えるって、小学生の時に身につけることなんじゃないかなあ...」

佇む大倫

邪悪な蛹

「大倫は、麦わら帽子がよく似合っていた」

「おはよう、たいりん」

「今日も細いね」

「うるさいなあ」

二人がかりで大倫の上着を脱がせる

「やめろお！」

麦わら帽子はかぶせる

「アウシュビツ」

「強制収容所」

「○○(なにか例え)」

「わーいわーい」

と、二人去る

「やれやれ」

「その姿は、ほとんど百姓みたいで」

「鈴木さん、お願ひします」

「ネイビーも出た」

「たまにテレビから、大倫の声が聞こえてきたんだつけ」

「ネイビーも出た、大沢事務所所属、鈴木大倫です」

「真面目なんだか、ふざけてるのか」

大倫っぽい一言

「なんか今日のコーディネート、全体的にトランプみたいだね」

「大倫はほんとにデリカシーにかける」

「気に障ること言ったかなあ」

「大倫は、麦わら帽子がよく似合っていた」

「あの日も」

「通りの先には、一時間に一本しか電車が来ない駅があって、今はもうないんだけど」

「あの日も」

「商店街には、かもめのたまごとかを売っている土産物屋さんがあって、今はもうないんだけど」

「通りのこっち側には、おじさんがやってるログハウスみたいな美容室があって、今はもうないんだけど」

「で、突き当りにはジョニーっていう、ジャズ喫茶があって、一度家族で行きたいねって言っていたんだけど、今はもうないんだけど」

「野生の鹿が、こう、いて、俺たちが乗ってる車に気付いて、ハツとして、さっそうと走ってったんだよね」

「それを見たときに、ああ、ほんとになくなっちゃったんだなって」

「って、これは俺のばあちゃんちがあった町の話なんだけど、」

「大倫は、どうして演劇をやっているの？」

「俺は、スポーツも勉強も普通で、でもきっと感性はあって、でもその発揮し所が分からなかつた。発想を、発表する機会がなかったから。それを発することのできる恰好の場…」
「それを極めて、この道で一本立ちして堂々と生きてると言えるようになりたい、かな。うん。」

松永と河野出てきて、大倫の麦わら帽子をとつて投げる。
「あああ…」

2 『÷月の 3 日間』

男1 えーっと、ええっと、今からええええっと、あああ、ええ、おう、えっと、もういいえっと、一月の三日間で言う話をしますよ、ええっと一月一日からの三日間だから、でも要是一月の三日間だから元旦からの三が日の話をします、三が日の話をするんだけど、で、えっとまず、起きて、起きたら、起きたんだ、起きたんだけど、ぜんぜん知らない部屋にいて、全然知らないで、知らないぞってなって、全然分かんないから、ここはまったく知らないなって感じで、でも普通天井みるよね、天井の色は自分の部屋と一緒に、確かに気付かなかつたんだけど、ちょっと布団の感じも違うし、でも自分の部屋じゃない、友達の部屋でもない、じゃ誰の部屋だ？あああって思って横を見たら、なんか女がいるの、女がいる、女がいる知らない女がいる、知らないなこいつって思った瞬間に、思い出したんだけど、知ってるわって、知ってる女だって、昨日のあれだ、昨日会った奴だ、昨日知った女だ、って、それを思い出して、そのあとにすぐ、昨日知りあってそのままの流れで来たんだって、ホテルに、ここがホテルだってそれで思い出して、そん時に、そんだけのことを飲みすぎて忘れたってこともそこで思い出したっていう、三段活用みたいな、そう、で、それで、まあ思い出したんだけど、まあその話を今からします、それは昨日の話だから、要はえっと今の一月一日のマイナス一日前の話、今日は一月一日だからマイナス一日前の話をします、だから 12 月 31 日の話なんだけど、12 月 31 日になぜか芝居を観に行くことになって芝居を見に行つたんだけど、12 月 31 日のマチネを観に行つたんだけど、年末のそんな日にマチネ公演をやる団体に知り合いがいて、で、それを観に行って、マチネ公演だから 14:00 開演だから、それを観に行って、それが池袋で、13:30 くらいに池袋に着いて、東口でて会談上がつたとこの銅像、池袋の劇場で、池袋でやつたんだけど、池袋に行つたんだけど、東口を出ると、そこに劇場あんじやん、でちょっとといったところにある劇場で、なんかお寺の人が、うん、そう、お墓とか、墓に囲まれた劇場、お寺とかのすぐ近くのなすごい劇場って、すぐくない劇場、んてかお寺の住職の人がいる劇場、いや、お寺の人が芝居が好きでそれが高じて運営してる劇場っていうのがなんか変わってるよっていうのをなんか聞いたんだけど、そこに行って、観て、芝居の内容は全然覚えてなくて、出待ちしてる時に喫煙所に行って、煙草を吸って、煙草を吸ってながら、ぼーっとしてたら女がきて、一緒に吸ってなんか仲良くなつて、それでそこでなんかうまく話が合つた、みたいなそこで、なんか、あつた、みたいな、そのままの話の流れで、だから、東口の劇場から、北池袋へ行って、ホテル入つた、っていう話なんだけど、で、その話をするんだけど、長崎みたいな銅像あんじやん、

男2 池クロウ？

男1 僕それ知らない、長崎のやつ。 東口を出て、芝居を見て、北口行った。

男2 東口でてどこの劇場って言った?

男1 東口を出る...

男1、男2(河野)に絡めとられる

男2 東口を出る、あれがあるじゃん、あのー、島、東口の島

男1 島ってなに?

男2 横断歩道わたるときの、島、横断歩道、島、横断歩道

男1 それ違う

男1 っていうのがあって、結局その喫煙所にいた女っていうのが、まあなんだ、マチネをやってた、その演劇をやってる人たちのその団体の制作っていう、いろいろ事務仕事をするような役職を担っているような感じの女のなんだけど、それで、その人と話してて、で、で、で、その演劇やってるそこの団体には俺の大学の同期の先輩とかも一緒にいて、で、その公演が全部終わって、俺も観に行ってて、で、その人のツテっていうのかなあ、で、まあ公演が終わったから、お疲れ様でしたつって挨拶をして、打ち上げみたいなのが演劇もあるんで、飲みに行くかつつって、その打ち上げっていうのがあって、打ち上げに、おれも知り合いだから呼ばれて、まあ、えっとなんだ、行つたんですよ。そこに行つたんですよ。で行って、行つたら、で、まあ、その当然その、俺の好みのその喫煙所にいた女の人も団体の関係者だから当然その場にはいるわけで、いて、俺ももちろん部外者だからんー、気まずいっていいたらあれだけど、もやもやしてて、まあ端っこの方にいたわけですよ、でも席の関係でその喫煙所の女の人も、俺の好みの綺麗な女の人も、偶然なんか俺の近くにいたんですね、で、いい感じに話してて、好きな映画かなんかの、なんだあれは、エターナルサンシャインかなあ、エターナルサンシャインの話題ですごいこうお互い仲良くなつて、仲良くなつたんですけど、で、そうこうしてるうちにいつの間にか俺明日の朝バイトだつてなつて、帰んなきや終電でつてなつて、電車に乗りたいなつつて、終電で帰んなきやな、ってなつて、その女の人もえーと、一緒に、終電の時刻が一緒だつたからその女の人と一緒に、駅まで行きましょうつて、その女の人と駅まで行つたんですね。店出て、二人で駅まで歩いてて、で、なんか、なぜか二人ともよくわかんないんですけど、駅には入ろうとせずに、なんかちよつとまあ駅の前通り過ぎちやつたりなんかして、駅とは逆の方向へ行つちやつたりして、で、なんか、線路沿いどんどん歩いて行つたら...なんかまあ、その逆の方っていうのがホテル街つちやホテル街なんですよ、なんかノリで行つちやつて、

そのまま、ずっとこう、道歩いてくんんですけど、歩いてる途中俺が何を考えていたといふと、こんなこといたらあれなんですかけれどもあるじゃないですか、女性と一緒に歩

いていると、髪の匂いとか、その人黒髪で、セミロングくらいなのかなあ、俺結構黒髪も好きだし、長い髪の女人の人もすごい好きだから、芸能人でいうと、分かるかなあ、ストロベリーナイトの時の竹内結子みたいな感じで、かき上げる髪がすげえ素敵みたいなそんな人で、長い髪の女人人がすごい好きだから、すげえ好みというか、TSUBAKI のシャンプーの匂いがしちゃったりして、飲み会に行ったんだけれども、リンスの匂いがしちゃったりして、で興奮、興奮っていうかテンションもすごい上がっちゃって、ある時ふと一緒に歩いてたら、女性のひじの部分がこつんと当たっちゃって、くって当たっちゃったりなんかして、当たっちゃったときに、なんだよなんだよってなっちゃって、あれあるじゃないですか皮膚と皮膚が触れ合う感覚があるじゃないですか、あって、それがすごいその一瞬残って、それたぶんなんか、向こうもおんなじこと感じたみたいで、なのでなんか、手つないじやって、で、よくわかんないんですけど、流れで、即マンしたって話、なのかな、うううん、

男1 で、その時観た芝居がなんかまあシェイクスピアだったんですけど、うん、だからなんか、まあ、ぶっちゃけて言うと、まああの教科書通りっていうか、みたいな感じがする芝居で、なんか台本通りっていうかそのまま台本に書いてあることそのままやりましたみたいな感じになってて、忠実にやってんだけど、よく言えば忠実にやってんだけど、それだけ、みたいな、もちろん演出家いるんだけど、でもなんか、別に本に書いてあること以上のことなんもやってねえな、みたいな、だから演出家の仕事が何やってたのかわかんない、みたいな、「シェイクスピア！」みたいな、いやそりやシェイクスピアが書いてんだからそうなんだよ、そりや、なんかさ、それは本読めばわかるんだよ、流れとかもう分かってる訳、本に書いてある以上のことやってねえなっていうか、教科書通りの出来事で、これこうなったらこうなって、最後の場面そう終わるよねっていう、でもなんかすげえ金はかかるんだよね、装置も、立派なもんが立ってるし、小道具もすげえ細かいものいっぱい使ってんのに、なんかまあ肝心の演出面に関しては全然普通、みたいなほとんど何もされてない、みたいな。これもう本読んでんのと全然一緒感じで、全然立体化されてないみたいな、ただただやりました、みたいな、金は遣ってんのにそれが泣いてる、みたいな、そこにいる役者のこととかあんま思い出せないの、演出ってなんだよ、ってその時思つたりして、別の芝居でも、演出おもしろいのに本平凡みたいのもやっぱあって、うん、そう、すごいストーリーとかはもうよくあるやつでほんとにべたな話なんだけど、演出頑張ってつからすげえ見られるみたいのもまああって、なんか結局演劇ってバランスだと思うの、俳優だって主張しすぎると手前勝手な芝居したら崩れちゃうみたいなのあんじやん、どの部署も結局一緒だと思うのよ、だからなんかバランス、全体の構成みたいのをなんか全然そう、見てない気がして、そんな感じの芝居で、なんかもう観ながらすごい眠くなっちゃったのよ、いや、なんかもっとできたじゃあん、みたいな、

男 2.5 もういいよ、もういい。

男1 いやごめんなさい、打ち上げ来ちゃって…

竹内結子さん(仮)(以下竹) いえ、とんでもないですよ

男1 今日も遅れてきちゃってごめんなさい…迷惑かけちゃって、

竹 用事っていうか、忙しかったんでしょう

男1 や、そうっすバイトが、ギリでした、池袋もあんまり来たことないから、道迷っちゃって、

竹 よく来られるのかと、グリーンとかもじやあそんない

男1 いやあんま、ほんと来たことないんで。普段はだいたい下北とかいっちゃんで。

竹 ああ、下北ですか、あの辺も劇場たくさんありますよね。そっち系のお芝居が好きなですか？あの辺の芝居いいですよね。

男1 結構そっちばっか見てます池袋とかあんまり見たことないっす、けっこうそういう芝居ばっか見ちゃいますね。

竹 ああ、確かにちょっと池袋商業系に寄ってたりしますよね、やってる芝居が

男1 いやーマジよかったですわー

男1 全然よくなかっただろ 嘘つけ

竹 ほんとのところどうでしたか、正直な、

男1 あ、でも、正直に言っちゃうと、まあ、好きじゃなかったな

男1 言ってやれ、金返せって、寝てたって言え！

男1 ちゃんと寝てた、

男1 いや、ごめんなさい、でもどうなんですか、稽古とかどうでした

竹 私がついたのはもう小屋入りするときだったんで、そんなじやなかつた…はい、でも、ゲネとかもそんない、見せてもらったんですけど、、、正直好みじゃないですね。

男1 そうなんですか、うん、いや、まあね、いいんじゃないですか、おれも面白くなかったし

男1 よくねえよ

男1 あれっすか、人見知りっすよね

竹 あ、まあ、そうですね

男1 いや、俺も人見知りだから同じ匂いがしたっていうか、匂いって、そういう匂いじやなくて

竹 やでも話しかけて頂いて、助かりました。

男1 いやいやいや

男1 今おいくつなんですか

竹 23です。

男1 ああ、お若いですね。もっと若く見える…

竹 いやいや。19じゃお酒は飲めないです

男1 いや、だから、悪い子だなあ、って…もうずっと制作なんすか
竹 ずっとってほど長くもないんですけど、
男1 はじめてどれくらいなんすか
竹 一年くらいですかね
男1 うわあ、めっちゃできるじゃないですか、ベテラン
竹 ありがとうございます
男1 や、あれっすね、きれいっすね、きれいっすわ
竹 ほう、いやいや、とんでもないです
男1 今日も女優さん出てたけど、出ればいいのに、って、まあみんな思ってた…いや、ごめんなさい、いきなり、なんか
竹 いやいや、ありがとうございます。
男1 か、彼氏いるんすか？中に、座組にいる？感じっすか？だれっすか？
竹 いませんよ
男1 ほんとっすか、へえ、もったいない
竹 ほんとです
男1 よかった、へっへっへ、よかったです、なんだよなあ、
男1 やまあれっすよ、TSUBAKI すか、つかっての、髪、
竹 TSUBAKI すけども…
男1 あれっすか、即マンしようか

男1と竹内結子(仮)去る。

どこからか足音が聞こえてくる。

3 シシ・カンパニー

宍倉先生、竹刀を持っている。

「演劇で大切なのは、こういう動物的エネルギーな訳です。スポーツでも、スタジアムでは肉体からほとばしる動物的なエネルギーというのが生まれています。これがテレビなどを通じて観戦するときとの決定的な違いを生み出します。テレビや映画というのは、もとをたどれば石油などの非動物的エネルギーに支えられた表現です。演劇は、生身の動物的エネルギーに支えられた表現でなければならない。そういうことなんですね。せいつ！」

と、床を強く叩く。シシクラメソッドらしき訓練が始まる。(スタチュー)

二拍子。逐一それぞれの俳優のからだをチェックする。

「うん…左手が少し下がってるな。こっち側がちょっと高い。傾いてる。これ身体の癖だからな、直せよ。指先が汚い。肩に力が入ってる… よつ！」
とまた床を叩く。また一通り確認した後に、

「それじゃ次はこれに感情を付けていきます。喜怒哀楽ですね。一番やりやすい『樂』でやってみましょうか。はい。多いから二組に分かれて。いい？せいつ」

と、俳優を確認しながら

「目線、どこを見る。上半身がちょっと楽だな。左右対称になっている。」
と、悪い例を見つけて、

「彼、左右対称になってしまっての分かりますか？左右対称というのは樂なんです。樂っていうのは喜怒哀楽の樂ということではなくて、身体的に負荷がかからずに、ただ樂ちんということです。この訓練もただ非日常的なポーズをとるのが目的というわけではなく、最終的には演劇ですから台詞を発するというところまでもっていかなければなりません。で、(俳優に)樂にしていい。先ほどの動物的エネルギーの話がありましたけれども、やはり台詞を発するときにもそういう非日常的な強い、大きなエネルギーというのが必要になるわけです。これを、ただ突っ立ってそういう強い台詞を発するというのはとても難しいのでどうするのかというと、身体に負荷をかけるわけなんです。」

と、実験台を一人選び、

「おい、お前。マクベスの5幕5場の台詞な。まず普通に立ったまま言ってみます。」

と、実験台の俳優

「明日、また明日、また明日と、云々…」

「こういう感じですね。これが、身体に負荷がかかるとどうなるか。はい。」

と、実験台、改めて厳しいポーズで下半身に負荷を掛け、

「明日、また明日、また明日と、云々…」

止めて、

「こう変わる、と。はい、ありがとう。」

このとき大切なのは上半身もそうですが、実は下半身になります。武術なんかでも丹田と言つたりしますが、自分の重心のありかを意識して、きちんと腰を落とす。そして腰を据えた状態で発語してやる。そうするとおよそ日常では考えられない力で言葉が出てくる、と。これが肝要です。俳優が楽に喋ってしまっては、わざわざ劇場にまで観に来て頂く意味がない。はい。じゃあそれを踏まえてもう一度。」

明日また明日また明日と

時は小刻みな足どりで一日一日を歩み

ついには歴史の最後の一瞬にたどり着く

昨日という日はすべて、愚かな人間が塵と化す死への道を照らしてきた

消えろ消えろつかの間の灯火

人生は歩き回る影法師、哀れな役者だ

わめきたてる響きと怒りは凄まじいが意味はなに一つありはしない

Just Do it!!

大倫が出てくる。

4 逆灰皿

大倫が舞台上にいる。

つかこうへい氏の熱海殺人事件(初演台本)と見せかけて、これは鈴木忠志氏の演劇論『内角の和』からの引用であるかもしれない。

ムルソーはかつて、一発のピストルの引き金をひいたのは太陽がまぶしかったからだと言いましたが、今回の熱海殺人事件は、日本の夏が用意した殺人と言っても、言い過ぎではないと思われます。被害者山口アイ子は死ぬべくして死ななければなりませんでした。なぜなら、貧しい工員—不細工な女工—熱海—腰ひもという道具だけが用意されるだけで、一人の人間が死ぬにはもう十分だからであります。

われわれは現在、一週間風呂に入らなかっただけでも、殺人がおこりうる夏があるのでということを疑うことはできません。アイ子はある夏、暗く倦怠した日常のなかで死すべくして死ななければならなかつた。

この事件は殺人という行為そのものではなく、/殺人が行われる状況そのものの構造を実際に見事に顕在化させたという点において、私にひとりの人間が殺されるに十分足りうるだけの実感を与えたのであります。

はっ、私ですか、今、火をつけようとしたところであります。

この長台詞の間に男が二人現れている。

男たちは舞台上の大倫に激しく、情熱的に演出を付けていく。

が、その演出は一切の具体性に欠き、演出を付ければつけるほどに俳優の生氣は削がれ、どんどんぐずぐずになっていく。

その様子は『もののけ姫』のでいだらぼっちのようでもある。

舞台上の命の生殺与奪劇。

松永 …はい。どうもよろしく。演出の松永です。

宍倉 プロデューサーの宍倉です。

大倫 よろしくお願ひします。

松永 じゃあ、もう一回最初からやっていこうか。

大倫 はい。

と、仕切り直し、

松永 よろしくお願ひします。よーい、はい。

大倫 ムルソーはかつて、

松永 はい、はい、はい。

と、止める。

松永 最初の音がちがうな、最初の音が…。

大倫 …はい。

松永 最初の音をよく聞いていこう。もう一回いこう。

大倫 …。

松永 よーい、はい。

大倫 ムルソーはかつて、

松永 ちがうって言ってんだろ！！！！！！

大倫 ……。

松永 何回言ったら分かるんだ！！！

大倫 (2回)

松永 まだ2回か！！！？？いいんだよそんなこと！！耳で聞けって言ってんだろ！！！なん
で自分の中から発せられる言葉を、もっと聞こうとしないんだ！！？

大倫 …。

松永 君は自分のからだにどれだけノイズが走ってるか分かってるか？？君のからだからはノ
イズが全然ないじゃないか！！！

大倫 (ノイズ…！)

松永 若いのになんだ、もっとノイズを出せよ！！！しっかりしろ！！宍倉さん！！

宍倉 語頭をもっとしっかり聞こう。「『ム…』えっ、どっから聞こえるの…？」これでいいこう。

松永 行け————！！！！！！

と、仕切り直し。

大倫 …よろしくお願ひします。

松永、固唾をのんで見守る

間。

大倫 ム…？(と耳をすませる)ルソーはかつて、一発の…(と耳をすませる)ピストルの引き金
をひいたのは太陽がまぶしかったからだと言いましたが、

松永 いいぞ、それがノイズだ…！！！

大倫 今回の熱海殺人事件は…(と耳をすませる)、日本の夏が用意した殺人と言っても、言
い過ぎではないと思われます…(と耳をすませる)。

松永 (興奮して)続けて！

大倫 被害者山口アイ子は

松永 (激昂して)なんだよ君はあああああああああっ！！！なんでそんな確かな足どりで前
へ進めるんだ！！！？

大倫 (足どり…)

松永 ええっ！！？君はいくつだ！！？

大倫 …27です。

松永 若いな！！ほんとに若いな！！！(びっくりする)
君は新宿駅を、目をつぶって歩けるか！！？歩けるかって聞いてるんだ！！！！

大倫 (「歩けません」の心持)

松永 俺は歩けないな！！(と、手で目隠しをして)絶対ぶつかるな、うん、絶対ぶつかる
よ！！

大倫 …。

松永 なんなんだその確かな足どり…！！ねえ、宍倉くん！！

宍倉 これはね、「なんだかさっきから、カブトムシに後をつけられている気がする」。これでいつ
てみよう。

松永 (熱狂して)それだ——————！！！

と、仕切り直して、

大倫 なぜなら…(カブトムシに後をつけられている心持)、貧しい工員—不細工な女工—熱海
—腰ひもという道具だけが用意されるだけで…、(不確かな足どり)

松永 (熱中して)そうだ……演劇はハプニングだ……！！！ハプニングの積み重ねだ！！

大倫 一人の人間が死ぬにはもう十分だからであります。

松永 後ろにもカブトムシはいるぞ…！！

大倫 (おののいて、)われわれは現在、

松永 (激昂して)なんなんだ君は一体ほんとにああ！！照明は一体何のためにあるん
だ！！！？

大倫 …照らすため

松永 そうだ！！君を、照らすためだ！！！君は、観客の視線を浴びなければいけな
い！！！観客の欲望に、その身体で応えるんだつつ！！！

大倫 はい…

松永 君自身のからだを、アジテートしていくんだよ…！！！？宍倉ああああっ！！

宍倉 ガンジス河だよ。もっと浴びないと。

大倫 はい。

松永と宍倉は興奮しながら大倫を見つめている。

大倫 われわれは現在、ああ…(と、浴びている)一週間風呂に入らなかっただけでもおおお、(と、浴びている)殺人がおこりうる夏があるのだということををん(気持ちよさそうに浴びる)

松永 (困惑して)お前は何で立ってるんだ！！！？？？

宍倉 築地のマグロだ！！！

大倫 疑うことはできません。(と、築地のマグロの心持)アイ子はある夏、暗く倦怠した日常のなかで死すべくして死ななければならなかつた。

松永 (いよいよ興奮して)そうだ……そのまま死んでいけ……！！！若者は死ぬからこそ美しいんだ、なあ…！！？

大倫はいよいよマグロ然としてくる。

大倫 この事件は殺人という行為そのものではなく、

松永 旗を振れえええええつ！旗を振って行進していくんだ！！

大倫 殺人が行われる状況そのものの構造を

松永 この混沌とした世界に、君は旗を振って先頭を突っ切っていかなければならない！！！

大倫 実に見事に顕在化させたという点において、

松永 …死ねっ！！死んでいけ！！

大倫 私にひとりの人間が殺されるに十分足りうるだけの実感を与えたのであります。

松永 死ねよおおおおおいい！！！！！！

大倫 はっ、私ですか、今、火をつけようとしたところであります…。

溶暗

5 いつかの劇場

静かな舞台。男たち壁・床にフレームを縁取っている。

それは線であり、線はフレームになり、面になり、いつかハコになるかもしれない。

厳かな儀式のようにも見える。が、墓堀みたいでもある。

三人の男

・実
・碩
・忠

誰かの面影。

男、おもむろにやってくる。「何をしてるんですか？」

誰も答えない。

ふつふつと、劇場の記憶が呑かれる。あるいは戯曲の言葉が、ふつふつと発せられる。水泡みたい。

男 ...。

男、寝入ってしまう。

忠、実、あたりを見回しながら、舞台の上で何かを思い出すように、何かを待ちながら、目を閉じる。

鈴の音。

溶けるように暗転。

長い間。

ゆっくりと明転すると、もう一人の男(碩)が立っている。

間。

碩 話していいかな？

実 いいとも。
碩 約束の時間より一時間も早く来すぎちゃったよ。
忠 いいさ。見ての通りずっと暇なんだ。
実 なんだか昔みたいだな。
碩 きっと僕らは お互いに暇をもてあましている時にしか正直に話し合えないのさ。
忠 どうもそうらしいね。
実 でも暇つぶしの友だちが本当の友だちだって誰かが言ってたな。
碩 君が言ったんだろう？
忠 あいかわらず勘がいいね。そのとおりだよ。

.....かたわらで、戯曲のことばがぶつぶつと発せられ、劇場にしみ込んでいく。

碩 『セールスマンの死』
実 お前はウイリー・ローマンをやった。
忠 こいつも役者をやってたんだ。
実 役者なんてものじゃない。
碩 『三年寝太郎』の役者で出てきた。
実 その話はやめよう。
忠 何かの時に、お前の家で、初めて書いたっていう戯曲を見せられた。まだ出来上がっていらない断片の三、四枚だかを見て、俺はすごくおもしろいと思った。

バッハの「管弦楽組曲第一番」が聞こえる。

忠 それで、劇団をつくろうかということになった。
実 高田馬場から信濃町を通って有楽町まであるいて、日比谷の映画街、ガードの手前のところで劇団をつくろうという話がきまったく。
碩 寒かったな。
忠 ここは、もともとただの喫茶店だった。
碩 マスターが、2階に劇場を建てないかって言ってくれたんだ。
実 214万。
碩 みんなでアルバイトなんかして溜めたな。
忠 丸一年は稽古や公演どころじゃなかった。
碩 自分たちの劇場。
実 間口3間、奥行2間

忠
お前は、演技をするとき、いつもたじろぐんだ。加代子は、たじろがない。
碩
そうだな。
忠
お前はアマチュアなんだ。
実
それが、俺の作品にうまくあつた。
忠
お前には、プロとアマの断絶がある。
碩
お前にはない。
忠
演出家というのは、「私」がない。”関係”だよ。
実
お前と仕事をやる人間は相互に健康に別れるということがない。
忠
役者希望だったんだ。入ってみたら、一番面白いのは演出だって。
実
耐えきれるなら、馴れ合いなんかより「憎悪」に裏打ちされていた方がいい。
碩
その意味で、俺たちは極めて清潔だったと思う。

劇場の記憶が、すこしさわがしくなる。

実
質問の順番がばらばらになるけどかまわないか？
碩
かまわないよ。
忠
お前はもう死んでるんだろう？

長い間

碩
そうだよ、俺は死んだよ。

鈴の音

記憶の断片、面影が、舞台の上からゆっくりとなくなっていく。

男が起きると、そこには誰もいない。

6 神里雄大『レッドと黒の膨張する半球体』より
スポーツマンのような男たちが水を持って入ってくる。
河野の合図で、松本以外の全員が空に向かってジャンプしている。

7 OUT (小川)

舞台中央に一点のスポットライト。そこに入ろうとする小川。
スポットライトの外へ吹っ飛ばされる。
抑え込まれる。
立ち上がったり奮起するたびに下記リストの中から何をかひとつぶやき、立ち上がる。

「かつて演劇は芸術であり、娯楽だった」

「今はそのどちらでもない」

「演劇は、死んでしまった」

「クソ屑演劇が...」

「絶対にひっくり返してやる」

以下リスト。

1994年12月、演劇批評誌「シアターアーツ」戦後50年ベスト戯曲と劇作家

- 1 サド侯爵夫人 三島由紀夫
- 2 熱海殺人事件 つかこうへい
- 3 少女仮面 唐十郎
- 4 小町風伝 太田省吾
- 5 上海バансキング 斎藤憐
- 6 寿歌 北村想
- 7 友達 安部公房
- 8 なよたけ 加藤道夫
- 9 マリアの首 田中千禾夫
- 10 女の一生 森本薰
- 11 マッチ売りの少女 別役実
- 12 常陸坊海尊 秋元松代
- 13 夕鶴 木下順二
- 14 真田風雲録 福田善之
- 15 世阿弥 山崎正和
- 16 奴婢訓 寺山修二
- 17 かさぶた式部考 秋元松代
- 18 あの大鶴、さえも 竹内銃一郎
- 19 象 別役実
- 20 美しきものの伝説 宮本研

劇作家

- 1 井上ひさし 2 三島由紀夫

3 唐十郎 4 清水邦夫
5 別役実 6 秋元松代
7 木下順二 8 つかこうへい
9 宮本研 10 福田善之
11 田中千禾夫 12 安部公房
13 太田省吾 14 斎藤憐
15 寺山修二 16 野田秀樹
17 佐藤信 18 北村想
19 矢代静一 20 竹内銃一郎
21 加藤道夫 22 山崎哲
23 森本薰 24 飯沢匡
25 三好十郎 26 山崎正和
27 川村毅 28 鴻上尚史
29 岩松了 30 鈴木忠志

河合祥一郎先生の必読戯曲リスト

オイディップス王—ソフォクレス
ロミオとジュリエット—シェイクスピア
ハムレット—シェイクスピア
夏の夜の夢—シェイクスピア
三文オペラ—ブレヒト
桜の園—チェーホフ
かもめ—チェーホフ
三人姉妹—チェーホフ
驟雨—岸田國士
美しきものの伝説—宮本研
弱法師—三島由紀夫
赤鬼—野田秀樹
人形の家—イプセン
十二人の怒れる男—ローズ
父帰る—菊池寛
マッチ売りの少女—別役実
友達—安部公房
こんにちは、母さん—永井愛

ガラスの動物園—テネシーウィリアムズ
ゴドーを待ちながら—ベケット

炎の人—三好十郎
紙屋町さくらホテル—井上ひさし
焼肉ドラゴン—鄭 義信
ヘッダ・ガブラー—イプセン
欲望という名の電車—テネシー・ウィリアムズ
ヴァージニア・ウルフ—怖くない—オールビー
どん底—ゴーリキー
アマデウス—ピーター・シェーファー
はだしで散歩—ニール・サイモン
女中たち—ジヤン・ジュネ
令嬢ジュリー—ストリンドベリ
セイムタイム・ネクストイヤー—バーナード・スレイド
管理人—ハロルド・ピンター
セールスマンの死—アーサー・ミラー
守銭奴—ジヤン・モリエール
サロメ—ワイルド
なよたけ—加藤道夫
オットーと呼ばれる日本人—木下順二
大寺学校—久保田万太郎
天皇と接吻—坂手洋二
楽屋—清水邦夫
マリアの首—田中千禾夫
サド侯爵夫人—三島由紀夫
東京ノート—平田オリザ
演劇最強論リスト
岩井秀人—ハイバイ 岡田利規—チャーチル・フィッチュ 神里雄大—岡崎芸術座 危口統之一 悪魔のしるし ケラリーノ・サンドロ・ヴィッチ—ナイロン100℃ 篠田千明—快快 柴幸男—ままごと 多田淳之介—東京デスロック 中野成樹—中野成樹+フランケンズ 西尾佳織—鳥公園 藤田貴大—マームとジプシー 益山貴司—子供鉄人 松井周—サンプル 松尾スズキ—大人計画 三浦直之一ロロ 宮沢章夫—遊園地再生事業団 前田司郎—五反田団 三浦基一 地点 三浦大輔—ポツドール 本谷有希子—劇団本谷有希子 江本純子—毛皮団 広田淳—アマヤドリ 松田正隆—マレビトの会 木ノ下裕一—木ノ下歌舞伎 山本卓卓—範宙遊泳 タニノクロウ—庭劇団ペニノ 野田秀樹—NODA MAP 糸井幸之介
—FUKAIPRODUCE 羽衣 二階堂瞳子—革命アイドル暴走ちゃん 山本健介—ジエン社
鳥山フキ—ワワフラミンゴ
森新太郎 鵜山仁 小川絵梨子 宮田慶子 上村聰史 谷賢一 白井晃 三谷幸喜 宮城總

8 もういい

宍倉先生、舞台上に現れる。

「もういい、もういい」、と。

「もういい、もういい」

「もうわからない。」

「ポスト現代口語も、ポストモダンも、安直なポストドラマも」

「ポスト、ポスト、ポスト、ポスト…」

「この次はどこへと行こうか、その次へ行こうともがいて」

「僕たちはどこまで行けるのだろう」

「もうやだ、もうやだ」

「もうやめてくれ。」

「ポストゼロ年代も、ポストテン年代も、ありがちなポストドラマも」

「ポスト、ポスト、ポスト、ポスト…」

「この次はどこへと行こうか、その次へ行こうともがいて」

「僕たちはどこへも行けやしない」

「もういい もうわからない」

「もうやだ もうやめてくれ」

「もうだめ もう手に負えない」

「もうむり もう暗転して」

9 おおきなかぶ

明りが点くとかぶを齧っている男

「カブだ」

おじいさんが現れる。かぶは抜けない。

「ところがカブは抜けません」

ばあさんやってくる。じいさんとばあさん。かぶはぬけない。

「それでもカブは抜けません」

まごといぬやってくる。じいさんとばあさんとまごといぬ。まだかぶはぬけない。

「まだまだカブは抜けません」

ねことねずみやってくる。じいさんとばあさんとまごといぬとねことねずみ。それでもかぶはぬけない。

「まだまだまだまだ抜けません」

うんとこしょ、どっこいしょ。

「それでもカブは抜けません」

かぶにいどんでいくひとびと。

10 「帰ろう」

河野、二ノ戸、自転車をもって現れる。
河野は麦わら帽子、手ぬぐい、サンダル。
ふたりはしりとりをする。

壁には、誰かが撮った写真。

11 ハッピーナンデスネ

基本ルール

各人に番号が与えられる。リズムに乗って歩きながら、順番に数字を言っていく。

各数字には振りが決められている。

松永「ハッピーナンデスネエ」

全員「ドウゾ」

丸山「ドウゾ」

松本「ドウゾ」

1、宍倉 スラッシュ

2、二ノ戸

3、小川 リバース

4、河野

5、鈴木 ニーブレイク

6、松永

7、丸山 指パッチン

8、松本 膝グリーン

ぐるぐると、回り続ける。

徐々に激しくなる。

きっかけで、溶ける or 溶けつつ壁に。

1宍倉

2鈴木

3小川

4丸山

5河野

6松本

7松永

8二ノ戸

の順番で

だからわたしは、あなたがたに言います。

自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと、心配したり、

また、からだのことで、何を着ようかと、心配しては、いけません。

昔、書かれた、ものは、すべて、私たちを、教えるために、書かれたのです。

何も、思い、煩わ、ないで、あらゆる、場合、に、感謝、を、もって、ささげる、祈り、と、願い、に、よって、明日、の、こと、明日、の、こと、明日の、こと、明日の、こと、明日のこと、明日のこと、ハッピーナンデスネ

全員「ドウゾ」

12 シカ

丸山： ハッピーナンデスネ、ハッピーナンデスネ、ハッピーナンデスネ……

客席入り口から男が入ってくる。宅急便のおじさんだ。箱を届けに来たのだ。

おじさん： 失礼しまーす。えつ。……すみません…すみませーん…すみませーん！

丸山： あつ、どうぞ…

おじさん： お届けものです…サインお願ひします。

丸山、箱を受け取る。開けると中から光が放たれる。

丸山、音の流れに乗りながら踊る。

ハッピーナンデスネ1～8のルールを彷彿とさせるコンテンポラリーだ。他の役者も後ろから音の流れに乗って出てくる。最終的に後ろに並んで座る。

丸山 なんか一父さんの中学の時の後輩かな/が波にのまれたらしいみたいな/で亡くな
ったらしいんだ よっていう/で俺もその人よく知ってて/なんかちっちゃい時あの七夕祭りとかよ
く参加してたん だけど/そこで太鼓たたいてて俺/んでその太鼓の先生がその人で/サカコーち
ゃんサカコーちゃ んってみんなから呼ばれてるおじさんだったんだけど

皆（サカコーちゃん）

丸山 <みたいな>

丸山 でその人もなんか亡くなつたっていうで俺とその姉ちゃんもその太鼓たたいてたから
すっごい ショックで

鈴木 「えサカコーちゃん死んじゃったの」

丸山 って言って/でそのあと行ったら普通にいてサカコーちゃんが/でしかも

宍倉 「おお」

丸山 とかって言われてさ

宍倉 「元気か」

丸山 って言われて/へサカコーちゃんみたいな/でもなんか生きてたの

皆（生きてたの）

丸山 <みたいな>とかって言えないじゃんなんか映画とかだと生きてたのか

皆（映画みたいな生きてたのか）

丸山 <みたいな>なるけどほんとに人がそのさ生きてると言えないよ

大倫 「ああおお久しぶり」

丸山 みたいな

大倫 「元気そうで」

丸山 みたいな/普通に会う時の自分みたいな/あれすごいね/あれはね結構ねなんだこれみたいな

大倫と宍倉 [短い二人のやりとり]

丸山 でそのあとあのバイバイって別れてから父さんに

大倫 「サカコーちゃん生きてたねよかったね」

丸山 みたいな

河野 「おうおうおうおう」

丸山 みたいな

河野と大倫 [短い二人のやりとり]

丸山 そう/でもこれはあの/絶対ほんとは人には言っちゃいけないよっていう/うちの撻の話なんだけど。あれ?

後ろの七人 あれ・あれ・あれ・あレ・あレ・アレ・アレ

ニノ そうね/アレと初めて出会ったのはえっとね中学校2年生くらいかな/そんときには初めて出会って/で最初はねあのーまあ他にも似たような種類がいっぱいあったからまあいろんなのを買ってた けど/でも最終的にこれだなってのが見つかってでそれがアレだったんだけどなんて言うかねまあ そりや好みはあると思うんだけどでもこう絶妙でなんかことあるごとに買ってたんだけど/なんか ねたまーにねたまーにね変わったのが出てきたりするんだアレとおんなじ種類のがでそうすると それしか置かれなくなったりするからちょっとね悲しいんだ/けど一番最初の状態のアレがすげー 好きだったんだ/もう疲れた時とかにこう飲むとねアレを飲むとねもう疲れが取れていく感じの/ 好きなんだよ/今だに飲み続けるなうん/でも俺はねなんかに移してというよりもそのままの方 が好きかなうん/一時期そのまあ冷てるより常温のほうがうめえかなって思った時もあるけどま あでもやっぱり冷てるほうがいいかなうん

小川 アレねえ/あーでも俺は結構昔からあちゃんちにあって/あのしょっちゅう飲んでたんだけど/ 何だろう結構蓋をこう歯でガッて開けて飲むのが好きでしょっちゅう/てかなんか蓋をこうやって いちいちペリペリ剥がして飲むのが面倒臭くて歯でガッてこうやってガッて開けて飲むのが主流 だった/だからうちのばあちゃんちのゴミ箱にはもう歯型がガッてついたアレの空いた亡骸が入ってるっていうのが通例で/でもなんかね母さんか/母さんが行儀悪いみたいな/ちょっとちゃんとや りなさいよみたいに言ってたんだけど/でも俺たちいとこ同士で大体冷

蔵庫開けてアレをガッガッ みたいなで飲んでたかな/でも最近はあんま飲まなくなっちゃったなあうん

松永 うん一俺もね/うん一アレはすごい好きなんだけど/アレ/なんつうの同じアレで同じ味だけどすごい飲みたかった時のアレがあるの/アレを普段飲んでるけどその時のそのアレを飲みたかったわけ/ それはいとこと鬼ごっこしてて/でカップを見てあなんか入ってるわって/そしたらいとこがごくごく飲みだして/えそれやばいんじゃないのって/飲んだ後にえっどうだったって/アレだったって/美

味しかったって/その味を今でも俺は求めてるみたいな/あのときのそのアレが飲みたい/今普通に 買えるけど/ほんと最近はたまーにしか飲まなくなっちゃったなあ

松永 飲みたいよね、アレ。

二人 飲もうつか。

それぞれ え、あるの。

松永 うん。あるー。

一步 そんで俺もアレがすごく好きで、でまあ飲みたいなと思って、でコンビニに行くんだけど もうそこにアレはなくて、ていうかほとんどもうアレどころか何もかも本当になくって、あねえなと思って。 本当によく覚えてるのは、あの日、バイトに行くときの夕方 17 時前くらいの時にもう明治通りが人でいっぱい、お店に着いてみたらお客さんもいっぱい、働いてる間にニュースが溜まったのを家帰って見て、あっやっべえなって。 なんかテレビでは「大丈夫です」みたいな「自然消滅します」みたいなのを言ってて、その後 そんなわけがないみたいな Twitter の応酬があって。 2日後お芝居見に行くってなったら電車がまあがらがらで、建屋が吹っ飛んでいたから、本当に屋外に出ちゃダメな日だったんだよね、なんだけどこのこ出かけて行っちゃって、で横浜の日本大通りのローソンに行ったらそこにもアレも何もなくって、でたまたまあった牛乳とミルクパン買って食べて、そう、欲しくもないパンを買って食べたってのはすげえ覚えてるの、なんかこれ全然食べたくねえのになんか買ってたっていう。で行ったら客席の半分も埋まってなくて、で 制作の人が今日みたいな日に見に来てくださいってありがとうございますって、でその公演は初日が2日延びちゃって、だから行った日が初日で、お芝居が始まつたらそれが関東大震災についてのお芝居で、芥川龍之介の、で地震の描写がめっちゃあって人が死ぬみたいな台詞がたくさんあって、で多分みんな心の中ではこれほんと不謹慎だなって思いながら見てて、終わってそのあと家に帰った時にその公演が結局その日限りで打ち切りになりましたっていうのを知って。だからたまたまその幻の一回になつたやつを俺が見てたっていう。 とにかくその日もコンビニにアレはなくって、しょうがないから新宿のタワレコで欲しかった映画を一本買ってそれ流しながらポテチを食べてたのをよく覚えてるなあていう。

大倫：東京に僕はいて、
でもばあちゃんちに似た匂いを、

生活してると感じる時があって、

松本：あの日も

大倫：鼻にすんて入ってきたときに、

松本：あの日も

大倫：ばあちゃんちの匂いだなって、

小川：あの日も

大倫：また行きたいなって、

ニノ：あの日も

鈴木：ばあちゃんちは岩手の高田にあって、畠持つてた、家はやっぱり住宅密集地だから、まあまだわ かりやすくって、ここからここまでが誰々さんちでしたみたいのが。だけど畠とかになるともう。

通りの先には1時間に一本しかない駅があって、

竜平：「大船渡線陸前高田駅、スーパードラゴン、一ノ関行き、10:18 の発車です。乗り降りの際 は扉横のボタンをお押しください」

大倫 お土産屋があって

ニノ：「安いよ安いよ～かもめの卵、三陸わかめ、ウニと海苔の瓶詰め、」

大倫 商店街から裏通りに入つていったこの辺に、おしゃれなログハウスみたいな、うちのおじさんが経営していた床屋さんがあって、

一歩 「髪伸びたね、今日はどうする？」

丸山 「かっこよくしてください」

一歩 「はい」

大倫 ジョニーがあって

てつちゃんとマツケン「ちゃんと喫茶店の会話」

大倫 今はもうないんだけど。

～シカの話～

丸山：大船渡線の線路が通つてた、その脇に畠があつた、

たいりん：父さんおばさんいとことかと一緒に、畠の位置をはつきりさせないと、

丸山：分配するために、行ったんだ。

一歩:市役所の人と会って、でその畠に向かって、たぶんそこだったところで、メジャーで測つて だけど、草ぼ一ぼーで、線路も流されちゃってないし、
たいりん:市役所の人と父さんは話してた、
一歩:「いやもう全然わからなくなっちゃいましたね」
たいりん:みたいな、
丸山:「ほんとにねえ、全部流されちゃったからねえ」
たいりん:みたいな、他人事じゃないんだけど
一歩・丸山「いやあまいったまいった」
たいりん:みたいなテンションで、そう話してた。

ニノ: 松原って綺麗だったよね。松林の先に砂浜があつてさ。
宍倉: ねー。海でよく泳いだよね。そのあと海の家で飯食ったよね。
ニノ: ねー。松ぼっくりよく拾ったよね。
宍倉: それ海に向かって投げたよね。
ニノ: だったねー。流されてなくなっちゃったね。
宍倉: ねー。なんか一本残っちゃって前より有名になったけどね。
竜平:山の方には、親戚のおばちゃんがいて、そつちは被災していないから挨拶に行こうって、ほん とにそのまま綺麗な山があつて、ちょっとホッとして、じゃあまた来るねって、車乗つて帰つて、色々全部なくなっちゃつたねって、高田の市街地の方に行つたら、シカが居た。

マツケン:ジョニーっていうジャズ喫茶があつて、
てっちゃん:高田にジャズ喫茶は珍しくて、
マツケン:ほんとに古くからあつて、
てっちゃん:もう生まれる前からずうつとあつて、
マツケン:高田はすごい田舎だけどおしゃれなお店だったの、
てっちゃん:父さんと母さんは若い頃にそこ行ったことがあつて、
マツケン:だから今度行こうね行こうねって、みんなで行こうねって、
たいりん:津波が来てなくなったんだけど。
たいりん:ジョニーだった場所を通るくらいのところに、シカがいて、そのお店のなんか敷地ぐらいでなんか草食つてたんだよね、草食つて、で車で通りかかったら鹿がこつち見て、あやつ べえ、みたいな、慌てて逃げて、で山じゃなくて街に、ほんとに中心部の方に、すげえ賑やかだつた方に、むしろ逃げつて、あいつすげえ逃げつて、でもなんか、もう、もうこいつのものだみ たいな。

シカが舞う。

13 えのえを なれみて

皆一様にカッコをつけているが、彼らは方向をはき違えている。
あくまでイメージは NIKE の CM の様。クール。かっこいい。(のか?)
いたたまれない心持が大切。

河野 演劇にとって強さとはなんだ。弱さとはなんだ。
二ノ戸 日本人は強さが好きだ。それは憧れだ。
鈴木 憧れは持てないものの裏返し、いつまでたっても手に入らない。
丸山 弱いものは、死すべきか?
宍倉 多様性は認められないのか?
松永 強い演劇なのか?
小川 強い演劇は良いものなのか?
松本 それは、本当か?
河野 それは只のスポーツではないのか?
鈴木 演劇が、スポーツと決定的に違うのはただひとつ、
丸山 強さを目指さなくても良いことだ。
二ノ戸 強さは自ずと勝つことを望むようになる。
小川 しかし舞台の上の俳優に「勝ち」などあるのか?
松永 もしあつたとして、どれ程勝てば満足だ?
宍倉 ナポレオンでもアレキサンダーでも、勝って満足した者は一人もない。
丸山 舞台の上で足ることを知らぬ俳優ほど見苦しいものはない。
鈴木 強いものも弱いものも、
河野 酔いのものも美しいものも、
松永 邪悪なものも神聖なものも、
松本 すべて1つ舞台の上で肯定しうるのが演劇ではないのか。

...いたたまれなさは限界に達する。いっそなつっこく。ほどけて。ほぐれて。

鈴木 例えば、言葉は天から降ってくるもので、
小川 雨が葉っぱを打つごとく、ポツポツと、発せられる
丸山 そこに強さはないでしょう。
二ノ戸 大きさも、速さも、遠さも。
松永 でも、そうして発せられる言葉は、
河野 弱いなら弱いままに、あなたの心に届くかもしれない。

松本 たとえば、鈴を鳴らすように。
宍倉 胸の奥の、その心の奥の、もっと奥にある小さな小さな鈴。
丸山 人は皆心にそんな小さな鈴を持っている、と仮定してみましょう。
小川 その鈴は、大きな力や、声では決して鳴らすことが出来ません。
二ノ戸 琴線。
鈴木 小さな声で、祈るように。
宍倉 そうして初めて、声は思いとなって、心に届きます。
松永 そうして、あなたの心の鈴を鳴らします。

ゆっくり。祈るように。ちいさく。

演劇は、好きですか？
僕は、大好きです。
劇場からの帰り道、あなたが少しでも幸せになっていることを心から願っています。

河野 じゃ。

アフターイベント用切り落とし」

14 とにかく怒れる男たち「6人のトウフェイス」

男たちがテーブルに着かされている

てめえ何だこの野郎、おいこら、結局言いたいことが分かんねえんだよ黙ってたらさあ!!

なんだよ、ああ？言いたいことあるなら言えってコラ！

結局お前はそうやってリスクを取らねえんだよ凡庸なことしか言えねえじゃんかよ

そんなこと言うだけなら別にうちじゃなくてもいいだろ、何回そういうこと言わせんだよ

俺はずっと言ってるじゃんか面白くしろ、面白いことを言えってさあ

何も凡庸な当たり障りないと言えなんて一言も言ってねえだろ馬鹿

と、丸山、鋭いタックル。

やめろ お前はとにかくタックルをするな 危ないだろ 下半身にくるな

着ぐるみ、もぞもぞしている

お前こないだの公演で「台詞が多い」つったの今でも根に持ってるからな よってお前は今
回そういうことになっている

何かを訴える

なんだ？ 聞こえねえんだよ 声に頼るんじゃないよどうにか表現しろよ なんだよ なんだよ

それは 身体能力をそういうことに使えつつてんじゃないんだよ いいからずっとそうしてそ
こにいろ 言葉を発するな

松永、暗黒舞踏

お前は何なんだ 身体表現か？ 踊れば良いってもんじゃないんだよ なに？

何を言ってるんだ え？ よせ まるでかみ合わない やめろ もてあますから

お前は何者だ？ まったく意味が分からぬ よせ！ やめろ！ やめろと言ってるだろ

河野、何かごそごそ食べようとしている。

お前、何を食ってる。 何を食ってると聞いてるんだよ！ (着ぐるみを)脱ぐな！ どいつもこい
つも

鈴木、矢面に立つ。

おい！ 脱げ！ (と、上着を剥ぎ取る) ほら見ろ 捕虜じゃないか アウシュビツ... アウシュビツ
だお前は

あれだけ鍛えろって言ったのに！ 理屈はいいんだよ！

鈴木「なぜ身体を鍛えねばならないのか？」

いいか、二度と俺に質問するな

松永、野球部の装いをしている。

なぜお前はシャドウピッチングをしてる よせ！ 野球部？ 日本語を話せ！

なぜバットがあるんだ

ここでは止せ！舞台上だろう！

丸山、タックル

だからタックルをするな！新人だろう お前はこの座組みの中のカーストの最下位だ、よく考えろ

(「相撲、相撲」の声)

何で相撲を取るんだよ 取らないよ 取らないって言ってるだろう

スタンガンは使わない 相撲だよ！ 何を用意してる

(松永、紙相撲の心持)

勝ち目がないだろう、ペラッペラじゃないか いいからじゃねえんだよ

何一つ良くねえんだよ

(なにかすごい動き)

なんだお前なんでも出来るな すげえな。お前の身体能力は分かったから、じつとしてろよ

あれ、しつしーは？？

(シャーロックホームズ)

シャーロックホームズは観ねえよ。なぜ観るのか妥当な理由を 100 探せ、話はそれからだ。

ちがう、本題は、だから、これじゃ次の公演のことが何一つ…

河野か松永、信じられない言動

お前は何を面白いと思って舞台に立ってるんだ？

しつしー、ソーセージを食べながら戻ってくる。

ソーセージ？どこにあったんだよ…。

…と、ひとしきり怒った結果もみくちゃになる

うわ—————！

やめろ！

あ—————っ、あ—————つつつつ

なんで、くそっ、おおおおあああつあああああ！

15 小川の場

なかなかハッピーな現場だったぜ…

おっ？

ひたすら牛丼食べたり子供の活躍を我が事の様に喜びつつ、自分もモデルに誘われたとか
自慢し出す、自分のステータスのために息子を子役にしてるフシのある奥様がいたり
文明社会を憂う心持になりそうだ

早く帰りたいとか言い出すおじ様がいたり、早く帰れや、その分仕事俺によこせ

間

「怒りの筋トレ開始」

一同筋トレを開始。例外なく怒っている。

腕立て、腹筋、背筋、スクワット、バービー、各 30 回ずつ…